IS(インフィニット・ストラトス)　－黒揚羽（クロアゲハ）－

すぴねる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ（インフィニット・ストラトス）　―黒揚羽（スイロライトケス）―

【Ｎコード】
Ｎ５５３５Ｔ

【作者名】
すぴねる

【あらすじ】
ＩＳ（インフィニット・ストラトス）。
それは、篠ノ之（しののの）束（たばね）が開発した”ＩＳの前では全て兵器は鉄屑と化す。ＩＳを倒せるのはＩＳだけ。”と言わしめる世界最強の兵器。強いて弱点を挙げるとするならば、女性にしか扱えない点だろう。これにより各国は女性優遇措置をとり始め、今や女尊男卑が時代の風潮となっている。
だが、物事には例外というものがつきものである。それはＩＳにもいえることだ。

ＩＳを動かした”男性”。それは全世界を驚かせた大ニュース。その男の名前は……

Prologue

みんなはハーレムｏｒ逆ハーレムに憧れたことはないだろうか？
異性に囲まれる。人間なら一度なら思うであろう願望だろう。

かくゆう僕もハーレムに憧れたことがある。……否、あった。現実は残酷だ。ハーレムは二次元から次元を超えなくていいと思う。それは個人の考え方次第だと思うけどね。
異性が減り同性が増えれば、当たり前だけど異性に対する気配りがしなくなっていく、つまりはデリカシーが無くなっていくということさ。まぁ、何が言いたいかというと、肩身は狭いし、あんまりいいことはないということだよ。嬉しい悩みって怒るひともいるかもしれないけど……それでも、やっぱり楽しく生きていかなといけないよね。

Episode. 1

「―!、―おり!、伊織!」
「…んー」
「早く起きろ、伊織。今日は入学式なんだ。遅れるぞ」
イヤだ。この温もりは手放さないし、誰にも渡さない!
「この手は使いたくなかったが、仕方ないな」
ちーちゃんが小声で何か呟いているようだったが僕には聞こえなかった。
「今すぐ起きなければ、これから一週間お前とは事務的な話以外、口をきかんことにすr「起きた!今、起きたよ!おっはよー!いい朝だね、ちーちゃん!」はぁ……元気で何よりだ、伊織」
「まぁねぇー。一度きりの人生だよ?楽しく、元気に生きないと損だよね」
「お前がいなければもっと平和に暮らせるんだがな」
と言いながらも遅いと毎回起こしにきてくれる幼なじみで同僚の織(おり)斑千冬(むらちふゆ)こと、ちーちゃんであった。
なんて言うと怒られるから黙っとこ。ツンデレありがとうございます。
ゴンッ!
「いったぁー!何するだよちーちゃん!なんで殴るのさ!」
「お前がおかしなことを考えるからだ。馬鹿者」

読心術！？これも僕とちーちゃんの愛の為せる技だね。

「……ごめんなさい。嘘ですからその振り上げた木刀をゆっくりもとに戻して下さい」

ちーちゃんはため息を吐きながらゆっくりと木刀をおろした。今回は真剣に死ぬかと思ったね。でも、読心術は止めてほしいよね。プライバシーがないじゃないか。

「まったく、今年は一夏も入ってくる。ただでさえ忙しいのに心労を増やすな」

「はーい。それにしてもいーくんかぁ。なんといっても史上二人目だもんね。ふふっ、楽しみだなぁ」

ＩＳを動かした史上二人目の男にしてちーちゃんの弟である織斑一夏。

きっと最初は、もう一人の幼なじみにしてＩＳの開発者の篠ノ之束（しののの たばね）。通称たばねんが弄って動かせるようにしたんだろうけど二回目はそうもいかなもんね。はてさて、これが僕らにとって吉とでるか凶とでるか。

「研究熱心なのはいいことだがあまり虐めてやるなよ。お前は一夏の先輩にあたるんだ。辛さや面倒くささはお前が一番理解できるだろ？世界で初めて男にしてＩＳを動かしたの人間。雨宮伊織（あまみや いおり）殿？」

ちーちゃんは呆れたような笑みを浮かべながらそう言った。

「ふふっ、ちーちゃんは心配性だなぁ。僕だってヒトの子だよ？限度ぐらい弁（わきま）えてるつもりさ」

僕はベッドから起き上がり朝ご飯をつくるためにキッチンにむかった。

「ふっ、どうだかな。お前は人間（ヒト）の次元を超越しているからな」

む。何なのさ、ヒトのことを人外の化物みたいに言って。僕だって立派な人間だもん。生徒会長もやってないし、過負荷（マイナス）とも戦ってないよ。それにすべての人間を幸せにしようなんて思わないしね。……なんて、変なことを考えている間に朝ご飯が完成した。

「ちーちゃーん。ご飯できたよー」

「あぁ、わかった」

ちーちゃんは読んでいた資料を棚に戻すと席につき、僕も席についた。ちーちゃんは朝はだいたいここで食べていくんだよね。

「今日は無難に目玉焼きとトーストにしてみました！それじゃあ」

「「いただきます」」

今日は起きるのが遅かったから簡単なものしかつくれなかったけど上出来だね。

「相変わらず美味いな。教師をやめて料理人になったらどうだ？」

「あはは、ありがとう。でも、面白いことを言うね。料理人なんて無理に決まってるじゃん」

「そうだな。本気で言ったわけじゃないさ」

世界に二人しかいない貴重な人材。いや、二つしかない実験体と言ったほうがいいかな？

どっちにしてもそれの片方がそんな平々凡々な職業につけるわけないよ。

「それはいいとして昨日の夜は随分遅かったようだな」
「まぁねぇー。新入生の専用機持ちのＩＳの性能と操縦者の成績をチェックしてたんだよ。一夏くんの専用機の製作のせいでする時間が昨日しかなくてね」
「だが、専用機はイギリスのブルー・ティアーズと日本の打鉄弐式（うちがねにしき）の二機。その上、打鉄弐式は未完成だ。そんな時間がかかったのか？」
「甘いね。ブリュンヒルデともあろうお方が先（さき）を見ないなんて」
「先だと？」

ちーちゃんは箸を止めて鋭い眼でこっちを見てきた。うー、そんなに睨まなくてもいいじゃん。

「そ。一夏くんの世界に向けての発表が三月末。ＩＳ学園の合格発表の後、ましてや願書の提出なんてずーっと前に終わってたんだから僕は新入生はこれで全員揃ったなんて思ってないよ」
男が操るＩＳ、ＩＳを操る男。どちらも魅力的な研究材料だし、主要国が動かないはずもないしね。

「……つまりは転入があるということか」
「ちーちゃんは頭がよくて助かるね。んーっと、そーだねー、今のところは中国・フランス、それにちーちゃんが指導しに行ったドイツだね。それにフランスは男の子だって。けど、これはウソかホントわからないねー」
「……」

ホントにフランスの子はどうなんだろ？フランスは崖っぷちだし、

見つかったらもっと大々的に発表するだろうしね。企業のテストパイロットみたいだし企業が隠してたのかな？でも……
ん？ちーちゃんが固まっちゃってるけどどうしたんだろ？

「おーい。どーしたの？ちーちゃん」
「いや、お前の頭のよさを再認識させられただけだ」
「よせやい。誉めたってなにもでないよ」
「本当のことを言ったまでだ。……ごちそうさま。美味かったぞ」
ちーちゃんは残っていたオレンジジュースを飲み干すと立ち上がった。

「お粗末さまでしたー」
「私はもう行くぞ。お前も遅れるなよ」
「はーい」

そう言って部屋から出ていくちーちゃんに返事をして、僕もトーストを口に押し込んだ。

Episode．2

「――いいか。いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

おぉう。なんという鬼教官。鬼も裸足で逃げ出しそうだね。でも、教室に入るタイミング逃しちゃったなぁ。やっぱり一組は最後にしといてよかった。どうしよ？ＳＨＲ（ショートホームルーム）も終わっちゃったし。

「いや待て、席は離れるな。そういえば、まだ実技担当の教師が挨拶に来ていないな。少し待っていろ」

お？これはチャンスだね。さっすが、ちーちゃん！僕は一組のドアを開けて入っていった。

「ハロ、ハロー。一年一組のみんな、さっきの入学式ぶりだね。僕がＩＳの実技と研究・開発を担当している、雨宮伊織だよー。苗字は呼びにくいから名前でいいよ、これからヨロシクね！」

それにしても一夏くんも箒ちゃんも成長したね。二人とも会うのは久しぶりだもんねー。

「うわぁ、やっぱり伊織さんはかわいいなぁ」

「かわいい七割、美人三割ってかんじだよね！」

「愛でたいなぁ」

最後の子、眼が据わってるよ？

それに僕は男なんだからかわいいとか美人とかは褒め言葉じゃないんだよねー。一度でいいから初対面でかっこいいとか言われてみた

いなぁ。

「やぱっり、織斑くんが攻めで伊織先生が受けがいいかなぁ？」

「「「「そ・れ・だ」」」」

四人とも僕は男色（なんしょく）はチャレンジしたことないよ。

バンッ！

「信じられませんわ！こんなナヨナヨとした貧弱な男が実技担当だなんて、屈辱の極みですわ！」

イギリス代表候補生で学年主席、セシリア・オルコット。

女尊男卑の思想に凝り固まった典型的な女性だね。貴族らしいし、余計にプライドが許さないんだろうね。仕方ない、か。久し振りの”開放”といこうかな。

「そうだよねー。こんな弱そうなヒトに、ましてや男に実技なんて教わりたくないよね。僕も嫌だもん」

「えぇ、そうですわ！」

「なら……これならどうだ？」

「「「「「「「「「「「「っ！？」」」」」」」」」」」」

◇　◆　◇　◆　◇　◆

伊織兄は千冬姉や束さんの幼馴染で、俺や箒の剣の先生だった。

千冬姉が教師をやってたのにも驚いたけど、伊織兄もここで教師やってるなんて思いもしなかった。俺より先に男でＩＳを動かして大きなニュースになってたから、ＩＳに乗れるのは知ってたけどこんなところで働いてたなんて。

「――、屈辱の極みですわ！」

すげぇな、アイツ。伊織兄に突っ掛かるなんて。けど、本質を知らないヒトからしたら弱々しい男の娘って感じだもんな。

「なら……これならどうだ？」

「「「「「「「っ！？」」」」」」」

伊織兄の纏う雰囲気が一瞬で変わった。さっきまでの飄々とした雰囲気と顔から笑みが消え、あるのは強者の威圧感だけ。例えるなら、空気が薄くなって息がし辛い圧迫感、喉元に刃物を突きつけられたような緊張感。知っていた俺や箒ならまだ余裕があるけど初めてなら辛いだろうな。

「セシリア・オルコット、イギリスの代表候補生にして学年主席でBT兵器の適正はイギリスでNo．1。まぁ、エリートだよ。……この学園では、な。けど、いくら適正が高くても兵器稼働率が四割切ってるようじゃ話になんねぇよ」

「っ！！」

「そんなんだから、適正トップでも候補生止まりなんだよ。まぁ、適正だけで代表になられても僕たち、指導者の立つ瀬がなくなるんだがな。それにその慢心にみたいな自尊心じゃ、いつか足元掬われるぜ？」

伊織兄が一気に捲し立てる。相手のオルコット？さんは座り込んでしまって顔も青ざめてる。少しやり過ぎじゃないか？……そして、俺がこの八つ当たりをくらうことを俺はまだ知らない。

「雨宮」

と、心配をしていると千冬姉から伊織兄に声がかかった。

「……と、まぁ真剣にするときはするから心配しなくてだいじょーぶだよ♪」

伊織兄が顔に笑みを戻すと張りつめていた空気が弛緩(しかん)して伊織兄の雰囲気ももとに戻った。けど、”ダイヒョーコーホセー（代表候補生）”とか、”ビーティーヘーキ（BT兵器）”とか、”ヘーキカドーリツ（兵器稼働率）”って何なんだ？英語か？

「それから、今からが一番重要なことだよ！ちーちゃんはね、仕事とか日常はドSっぽいけど、実はベッドの上だと結構、エ「ゴッ！」ム゛ッ！いったぁー！喋ってる途中で叩いたら舌噛んじゃうよ！」

「そのまま、噛み切って死ね」

相変わらずだなぁ、二人とも。心配してた俺が馬鹿みたいだ。まだ、みんなが一緒にいるときはあそこに束さんが入ってもっとややこしくしてたな。

「ひっどいなぁ。ホントのことじゃん♪言葉責めとか好「パシッ！」きでしょ？」

伊織兄が千冬姉の攻撃を止めた。身体能力も同格だもんなぁ。だから困るって千冬姉も言ってたっけ。

……あえて会話の内容には触れない。山田先生が顔を赤くしたり、クラスメイトの何人かが鼻を押さえてたりするけど。

「有ること無いこと言うな。それと学校では織斑と呼べ、馬鹿者ッ！」

「えーっ、それじゃあ一夏くんと紛らわしいじゃん。というか、じゃあ最初に僕が言ったことは”有ること”なんだね？」

―ブッ！

……輸血の準備をしたほうがよさそうだな。

「おっと時間だね。じゃあ、みんなまた授業でね。まやまやも授業がんばってね」

「えっ！？あっ、は、はい！」

「ふふっ。じゃあねぇー」

そう言って伊織兄は颯爽と教室から出ていった。ホント嵐みたいなひとだよなぁ。

「……まったく」

そう呟く疲れたようだったけど、どこか楽しげだった。

主人公設定

オリジナル主人公

名前　雨宮（あまみや）　伊織（いおり）

性別　男

身長　１６３．０ｃｍ

体重　５０．０ｋｇ

専用ＩＳ　？

容姿　黒髪・黒眼の純日本人。顔立ちは中性的で肩まで伸ばした髪と低い身長と相まって完全な男の娘。髪は後ろで一つにして縛っている。

ＩＳ学園の教師で担当のクラスはなく、全学年のＩＳの実技と研究開発を担当している。千冬や束と同い年で幼馴染で一夏や箒の剣の先生でもある。

身体能力は千冬と同等で頭脳は束に少し劣るぐらいの天才でＩＳのコアはつくることはできないが装備や強化パッケージはつくることができる。記憶力と頭の回転の速さは束をしのぎ、束とは異なるタイプの天才。

性格は飄々としており、つかみどころがない。ヒトをからかって遊ぶのが大好きで顔に似合わず結構なＳ。

今の悩みは成長期が終わってしまったのに低い身長なこと。しかし、顔が顔なため、このままでもいいかな？と思ったりもしている。

一夏いわく、中学生のころから外見は全く変わってない。

Episode．3

「決闘？」
「あぁ、朝お前に突っかかったあの小娘と織斑がな」
放課後、ちーちゃんと廊下で会うと一夏くんが来週決闘すると教えてくれた。
なるほど。所謂（いわゆる）八つ当たりというやつだね。プライドが高いだけにあのままじゃ、腹の虫が治まらないだろうしね。それにしても、一夏くんには悪いことしたなぁ、あとで謝らないとね。
……でも、

「おもしろいことになったなぁ」
「はぁ、少しは罪悪感を覚えないのか？」
「あはは、あとで謝っておくよ。でも、なんでいきなり決闘なの？」
「クラス代表者の決定のために、な」
「ふむふむ、クラスの大半は興味本位で代表者に一夏くんを推した。でも、オルコットちゃんがそれに激昂。ってとかかな？」
「まぁ、その後に激昂に対して織斑が切れたんだがな」
しかし、相手は代表候補生、普通の生徒とは格が違う。そんな相手にＩＳに一時間も乗ってないのに決闘を受けるなんて、一夏くん勇者か、よっぽどの馬鹿だよ。
「それで、お前に頼みがあるんだが」
「なんだい、ちーちゃん？」
「お前に一週間、織斑の指導を「無理だよ」……なぜだ？」

断った瞬間、ちーちゃんの眉間に皺がよった。やっぱり、一夏くんには甘甘だね。でも、僕にもちゃんとした理由があるよ。

「無茶言わないでよ。まだ、”白式”も完成してないのに一夏くんに訓練機で試合させるつもり？来週の月曜日に間に合うようにだったらこれから白式にかかりっきりになるからそんな時間はないよ」

「そうなのか、それなら仕方ないか」

付け焼刃の技術で試合に勝てるほど代表候補生は弱くない。なら、せめて機体性能でアドバンテージをつくってあげないとね。それより完成が間に合うかが問題だよ。搬入は明日だし、たばねんは『八割方出来てるよ』って言ってたからギリギリのところだね。

「けど、時間がつくれたら考えとくよー」

「本当にすまない」

「何言ってるのさ、僕とちーちゃんの仲じゃない♪」

ちーちゃんはすまなさそうに頭をかいた。でも、ホント、一夏くん大好きなんだね。ちょっと嫉妬しちゃうよ。

……一夏くんもシスコンだし、いつ近親相姦になるかとヒヤヒヤｔ

「い、嫌だなぁ、ちーちゃん。僕がそんなこと考えるわけないじゃないか。だから、その手に持ったＩＳ用近接ブレードを僕に渡してくれないかな？というより、そんなに大きなものどこから出したの！？」

「ふっ、乙女に秘密は付き物だ。訊くのは野暮というものだぞ？」

「ちーちゃんは乙女ってキャラじゃないよね」

ブチッ！

……あっ、墓穴ほった。まずい、やばい、マズイ、ヤバイ。僕の第六感が逃げろと叫でいる！！

「…コロス」

シュン！

ガンッ！

「チッ」

「ぉおう！ダメだよ、ちーちゃん！殺人で捕まりたくないでしょ！？」

ちーちゃんは近接ブレードを刃もみえないような速度で下段から切り上げてきた。僕はギリギリでＩＳを部分展開し受け止めた。てか、舌打ち！？

「心配するな。この学園はどこの国家から切り離された超法規的機関だ。法律ごときでは縛れん」

「その発言は教師としてだめだよー！！それに外的介入できないのは学生だけだよっ！」

「そうなのか？なら、隠蔽するまでだ。なに、気にするな。私とお前の仲じゃないか」

ダメだ。やっぱりキレてる、完全に眼が据わってるもん。こんなときは……三十六計逃げるに如かず！

僕は一瞬の隙を突き、窓からダイブした。

「あはは♪あばよー！とっつぁーん！」

「チッ！……逃がさん！」

そこから生死をかけた、第一回リアル鬼ごっこが始まった。

Episode. 4

はぁ、まったくひどい目にあったよ。ちょっとからかっただけじゃん。冗談だ通じないのはつらいねー。僕はなんとか鬼から逃げ切り一夏くんと箒ちゃんに会いに行くために一年生の寮のなかを歩いていた。

一夏くんと箒ちゃんが同室で助かったよ。まぁ、僕が同室にしたんだけどね。男が一人だけだし、一人部屋が無理なら幼馴染と同室の方が気が楽だろうって言ってね。理由は別にあるんだけどね。

ん？理由が気になるって？簡単だよ。……おもしろそうだからだよ。おっ！”１０２５室”、ここだね。ふふっ、やっぱりおもしろいね。もうドアに穴あいてるしやっぱり同室にしてよかったよ。僕は沸きあがってくる笑いを抑えながらドアをノックした。

「はいっ！開いてます」

「お邪魔するよー」

箒ちゃんから返事かえってきたから僕はそう言って部屋の中に入った。

「し、師匠！」

「伊織兄！」

「二人とも久し振りだね！何があったかは聞かないでおくよ」

「い、いえ！これはその、き、気が動転していまして」

箒ちゃんの狼狽える姿は可愛いなぁ。おっと、目的を忘れるところだったよ。なんたる破壊力。

「それより一夏くん。シャワーを浴びてきたらどう？まだなんでしょ？」
「はい。……でも」
「今日は箒ちゃんに用があるんだよ。それに一夏くんには聴かれたくない。乙女の話もあるしね」
「えっ！？し、師匠いったい何を！」
「伊織兄は男だろ」
「ふふっ。僕は男の娘だからいいんだよ」
「？」

一夏くんは訳がわからないという顔をした。まぁ、字は違っても音は一緒だもんね。

「ほーら。さっさと浴びてこないと時間なくなっちゃうよ？」
「は、はぁ」

一夏くんは納得いかない顔をしながらシャワールームに入っていった。

「……さてさて、箒ちゃん。何の話かわかってるかな？」
「い、いえ。わかりません」

本当にわからない様子の箒ちゃん。普通はそーだよね。

「じゃあ、ヒントをあげよう。”去年の剣道全国大会の表彰式、君はどんな気持ちだった？”」
「っ！？」

箒ちゃんの表情が一気に強張った。

◇◆◇◆◇◆

「じゃあ、ヒントをあげよう。”去年の剣道全国大会の表彰式、君はどんな気持ちだった？”」

「っ！？」

私は師匠は自分が大会で優勝したことなど一切知らないと思っていた。ましてやその時の様子なんて。

「どうやら思いあたることがあるようだね」

「……はい」

かろうじて返事はできたものの、もう終わりだと思った。私は師匠の教えを破ったのだ。

「僕は箒ちゃんが大会に出ると聞いてね。休みをとって予選から箒ちゃんのことをみてた。やっぱり弟子のことは気になるものだよ」

「……」

「箒ちゃんのことだから強くなってるんだろうなぁ、て期待してたんだ。うん、確かに技術はあがってたよ。ホントに強くなってた。……でも」

――その先は言わないでほしい、触れないでほしい。

「あれじゃあ、ただの暴力だよ」

「……」

「あのとき、君の剣には何がのっていた？優勝への野心？勝ちたいという気持ち？……違うね。そんな綺麗なものじゃなかった。怒り、憎悪みたいな負の感情」

「そのようなことは！」

「ない、と言いきれるかい？」
「……」
師匠は昔からそうだ。見ていないようで見ている。そして、見るだけでその剣にのった意気込みや気持ちを理解する。大会をみにきている時点で隠し通せる道理がないのだ。
「だんまりは感心しないなぁ。それも相手に向けた感情ではなかったね。まぁ、姉のことについての無茶な取り調べに対する怒り、その元凶である姉に対する憎悪。ってところかい？発散するのはいいことだよ？溜めすぎるとパンクしちゃうし。でも、今回君は発散する相手を人にした。それじゃあ、八つ当たりって言う名の暴力だね。仕事がうまくいかないからむかついて殺人犯すのと変わらないよ」
「……はい」
私はもう消え入りそうな声でしか返事ができなかった。
「僕は一番最初に教えたよね。”信念や目標を持たない力は理不尽な暴力に成り下がる”って。あの大会はどうだった？優勝したいと思ってた？」
「いいぇ」
「そうだろうね。君にすればストレス発散の場でしかなかったんだろうね。……はぁ、箒ちゃんにはがっかりだったね」
――終わった。師匠に失望された。
「で、君は表彰式でどう思った？」
「……」
「また、だんまりかい？答えろよ。うれしかったか？大勢のひとを叩きのめせて楽しかったか？気持ちよかったか？」

「っ！そのようなことはありません！……惨めで、自分がひどく汚く感じて、すぐにでも逃げ出したかったです」
「なら、いいじゃん」
「えっ？」

訳がわからない。何がいいのか。だが、顔を上げて師匠の顔を見ると、さっきまでの冷たい顔ではなく、あったのは暖かい笑顔だった。

「ヒトはよく過ちを冒すものだよ？でも、それで気付いたなら修正して次に繋げればいいよ。自分で気付いてたなら、それでいいよ。まぁ、師匠だしちょっとは怒らないといけないかなぁ、っと思っただけ」
「し、しょう……私、は」

うまく言葉が継げなかった。それよりも涙が溢れそうでそれを止めるのに必死だった。

「それでも！優勝はすごいことだよ？優勝おめでとう」
「っ！」

あぁ、やっぱり師匠には一生勝てない。もう、我慢ができず、涙が溢れだしてきた。

「ふふっ。箒ちゃんはいつからそんな泣き虫さんになっちゃったの？でも、今は僕しかいないし、存分に泣くといいよ」
—ふわっ。
「…うぅ、…っく、ふぅ…うっ……」

私は小柄な師匠に抱きしめられた。そして、その胸にすがりついて泣いた。小柄なはずなのに師匠が私なんかよりずっと大きく感じた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４（後書き）

一夏は空気を読んで長風呂です。　笑

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５（前書き）

注意！！
箒はヒロインにいれるつもりはないのであしからず、
期待していた皆様、申し訳ありませんｍ（＿）ｍ

Episode. 5

眠い、ひじょーに眠い。

白式が届いたとき、拡張領域（バススロット）を一つの武装が全て使ってしまって後付装備（コライザ）が付けられないなんて言うから、意地でも付けてやろうとチャレンジしたのがまずかった。

出来ないっていわれるとやってみたくなるのが人間。研究者は特にだよ。

……結局は無理だったけど。

「伊織せんぱーい」

「んー？」

僕が白式の調整をしていると、まやまやこと山田真耶先生が胸につけた大きな果実を揺らしながら走ってきた。眼福、眼福。

「まやまや、どうしたの？」

「あのですね」

――カタカタカタカタ……

「んー？」

「そのっ」

――カタカタカタカタ……

「んー？」

「白式がですね」

――カタカタカタカタ……

「んー？」

歯切れが悪いなぁ。何かあったのかな？おかしいな、調整は僕がし

てるし問題は起こらないよね、普通。

「……ちゃんと、聞いてます？」

「あっ、何だそんなこと？大丈夫だよ。僕は作業しながらでも話は聞けるから。それに、彼の有名な聖徳太子は十人の話を一度に聞いたって言うしね。人間は頑張ればどんなことだってできるんだよ」

「それと、これとは話が違うような……」

それに今手を止めたら確実に間に合わないね。タイムリミット、あと十分。

「そんなことより！白式は間に合いそうですか？」

「間に合うかなぁ？ってとこ。まやまやのその夢と希望の詰まった大きな胸もませてくれたら元気百倍で絶対間に合うね」

「え、え？えぇぇぇ！？そ、そ、そんなこと、そ、それにここは学校ですよ！だれかが見てるかもしれないじゃないですか！！」

「愛があれば場所なんて関係ないんだよ？」

「あ、愛ですか！？そ、そ、それに私は男の人に体を触られるのが初めてで……」

全く以って初々しいよ。ちーちゃんなら『口を動かす前に手を動かせ、馬鹿者』なぁんて一喝して終わっちゃうもんね。

「じゃあ、優しくしていただけるのであれば……」

「あはは、ははは っ！そこまで真剣に答えられたのは初めてだよ。ふふっ、冗談だよ、ごめんね？」

「か、からかったんですか！？」

「真に受けると思ってなくて、ね」

嘘です。真に受けると思ったからからかったんだけど。

「先輩、ひどいです！」

おぉう、まやまやが涙目で僕のことを睨んできた。やり過ぎたようだね。泣くまでするつもりはなかったんだけどなー。

昔からつるんできた女性たち（ちーちゃんとかたばねんとか）がちょっと異J、コホン、少し変わってたから限度がいまいちよくわからないんだよねぇ。

……よし！終了！！何とか、間に合ったなぁ。

「ごめんね。それより、完成したよ」

「えっ？」

「一夏くん専用機、白式。第三世代にして第四世代。”天災が生んだオーパーツ”ってところかな？とりあえず、一夏くんに届けてあげてよ。もう時間無いしさ」

「先輩は見に行かれないんですか？」

「んー、行きたいんだけどね。最近まともに、ふぁーあ、寝てないからねー」

ここ三日の睡眠時間は一時間もないだろうし、完成で緊張が解けたせいか眠くなってきたよ。ここは大聖堂じゃないし、ルーベンの絵画も無いんだけどね。

「そうですか」

「あとは一夏くんがフォーマットとフィッティングするだけでいいからねー。よろしくー」

「はい！わかりました」

「あっ、あとデータ頼むね。白式の分もブルー・ティアーズの分も」

「両方ですか？」

「うん。頼むよ」

「わかりました！」

まやまやは研究員に声をかけ運搬の準備に入っていった。僕は白式が運ばれていくのを見届けると研究所を出て自室へむかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６（前書き）

昨日中に投稿したかったｏｒｚ

Episode. 6

「……」

――ヒタヒタ。

人影が寝ている伊織に近づき、伊織の眠っているベッドの前で止まった。しかし、伊織に起きる様子はなくぐっすりと眠っている。

「ふふっ。寝顔はホントに可愛いのよね。お姫様みたい」

――スッ。

人影はそう言うとどこからともなくナイフを取り出した。そして、振り上げ伊織にむかって振り下ろした。

「愛してる。バイバイ」

――ヒュン！

――パシッ。

しかし、寝ていたはずの伊織の手がむかってくるその腕を掴んだ。

「……僕もいろんなヒトみてきてストライクゾーンも広いと思ってるけどヤンデレは範囲外だよ。お断り」

◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆

「まったく、暗殺者が目標の寝込みを襲って愛を囁くなんて、今時C級恋愛映画でもやってないよ」

僕は研究所から自室に帰って気持ちよく寝てたところだったのに招かれざる来客で終わっちゃったよ。

「それに暗殺者がそんな時間かけてちゃダメだよ。たっちゃん」

たっちゃん。更識(さらしき)家現当主にして、IS学園生徒会長、更識楯無(たてなし)。

「殺す気はなかったのよ。何しても振り向いてくれないからてっきりヤンデレが好きなんだと思ってた。起こし方その四、ヤンデレ風」

殺す気はなかったって、安っぽい刑事ドラマの犯人みたいだね。それにヤンデレみたいな狂気に歪んだ眼は辛くて見てられないよ。

「僕は年上が好みなんだよ。全部優しく包んでくれそうな大人の女性」

「見た目なら私の方が上に見えるじゃない？」

「精神(メンタル)の話。外見なら中学一年生でも僕より上に見えるよ」

僕は起き上がってベッドの傍に置いてある水にひと口飲んだ。ちなみに今までの起こし方のバージョンは、

ツンデレ風／妹風／世話を焼く幼馴染風

ってどんなエロゲですか？って感じだよね。ヤンデレ風は殺しにかかる瞬間に起きないと永遠寝る羽目になっちゃうよ。ある意味さいきょーだね。

「童顔それも中性的―（少女より）で低身長。更識家が調べたかぎりじゃ、中学生のときから容姿が変わってないっていうじゃない。一体どんな魔法を使ってるのかしら？」

たっちゃんがキッチンでお茶を入れながらそんなことを聞いてきた。というか、ここ僕の部屋だよね？それにそんなこと調べるために更識の名前を使ってあげないでください。

「うーん、とそーだねー。恋だね」

「恋？」

「そう、恋。だって恋をすれば老けないっていうじゃん。それに、

”若くとも　花の盛りの　短さよ
命短し　恋せよ乙女”

ってね♪」

「ツッコミ所が多すぎるわよ。あなた老けてないんじゃなくて、成長してないだけじゃない。それに乙女でもないでしょ？」

たっちゃんが苦笑しながらお茶を持ってきてくれた。おっ！この香りは”ニルギリ”だね。ちょっと早いけど旬だもんね。ありがたいけど、使うときは他人の部屋なんだし、許可ぐらいとってほしいなー。もう慣れたけどね。

「ふふっ。男でも一緒さ、ヒトの一生なんて短く、儚いんだよ？”その短い時間をどう有効に使うか”、が問題なんだ。人生は結果より過程だよ」

「へぇー、悟ってるのね。宗教開いて教祖にでもなったらどうかしら？」

料理人やら、教祖やら、この就職氷河期に引く手数多とはうれしいね。ＩＳ操縦できなくなっても食べていけそうだよ。

「大丈夫よ。ＩＳが操縦できなくなって捨てられたら、更識家が拾ってあげるわよ。……私の婿としてね♪」

「是が非でも遠慮したいね」

「あら、残念」

なんでこんなに僕の周りの女性たちは読心術が使えるんだ。

「乙女の嗜みよ」

「そーなのかー」

なにが乙女だよ。ちーちゃんやたっちゃんよりよっぽど僕の方が乙女に見えｒ「グフッ！」……たっちゃんの渾身の右ストレートが僕の胸に突き刺さった。

「そ、その…起き抜けに…鳩尾は…」

「伊織さんも馬鹿よね。織斑先生に散々やられてるのにまだそんなこと考えるなんて……もしかして、Ｍなの？」

「それはないと思いたいね。それより、今何時？だいぶ外明るいけど」

そう言うとたっちゃんは携帯を取り出して時間を見てくれた。僕の部屋は時計ないんだよねー。　時計が見えると時間が気になっちゃうし、携帯に時計が付いてるから困らないしね。

「えーっと、丁度十時半よ」

そんなに寝てたのか。充分だね。ちなみに今日は僕は有給。

「あっ！そうだ、これ山田先生から」

「ん？」

あぁ、昨日頼んでたやつか。僕は預かったメモリをパソコンにさして目を通していった。んー？やっぱり、一夏くんは負けちゃったか。

「それと、オルコットさんが辞退して織斑くんが代表になったらしいわよ」

「なんで？勝ったのはオルコットちゃんなんだよ？」

それにしても相変わらず情報が速いなぁ。

「なんか、オルコットさんが織斑くんに惚れたみたいなのよ」

「えぇ！？……あはは、おもしろいね！惚れるって短期間で変わりすぎだよ」

「それは、”乙女の心は秋の空”って言うじゃない？それほど変わりやすいってことよ。それじゃあ、私は次の授業があるからいくわね」

「ん。またねー」

たっちゃんは僕の返事をきくと部屋から出て行った。結局何しにきたんだろ？僕はすっかりぬるくなってしまったお茶を飲みながら、たっちゃんから預かった資料に目を通していった。

……あれ、ファイルが一つ多い。試合のデータは全部見たはずなのに。僕はその余っているファイルを開けた。そこにはひとこと。

――”白式”強奪ノ為ニ動ク組織有リ。

漢字と片仮名とは古風だね。これはたっちゃんの仕業だろう、用事はこれだったのか。さっきの会話は全てカモフラージュ。しかし、相変わらずうまいねぇ。僕でも気付けないなんてね。

…それよりも、情報が速過ぎる。一夏くんに専用機が与えられるのは子供でも少し考えればわかることだけど、名前は公表されてないはずだよ。だから、あえてたっちゃんは名前を強調した。そして、情報が速過ぎることに疑問を持ったたっちゃんは偽装してこのことを僕に伝えた。

となると、考えたくはないけど……

「内通者、か」

偽装はどこに目があるかわからないしね。まぁ、組織は見当がつくけど、内通者は難しいなぁ。生徒のプロフィールは国家機密並みのセキュリティーだもんねー、代表とか候補生なんか特にね。けど、たっちゃんも行き詰まってるからぼくに伝えたんだろうし、やるしかないな。

「結局休みはなしっと、はぁ」

少し憂鬱になりながらもなんとなく最初に選んだ、某ヤクザA国のデータベースをハックした。

Episode．7

四月下旬。
今、世界はひとつのニュースで持ちきりになっている。

四月上旬に起きた世界各国の国家最重要機密のデータベースが一斉にハッキングされた、世界同時サイバーテロ。
白騎士事件のように兵器がハッキングされ制御不能になったわけではなく、ただ”データが見られただけ”だが、ハッキングされた数はそれをはるかに上回っている。
データのなかにはＩＳのものも含まれており、もし世界中のＩＳを暴走させられたら、白騎士事件の比ではなくなると各国は警戒感を強めている。そして、データベースにはいずれも、”ちーちゃんは鬼”と言う文字が残されており、犯人の手がかりになるのではないかと解析を急いでいる。

……すいません。僕です。だって、ハッキングするだけじゃおもしろくなかったからアレンジを加えたのさ。まぁ、ニュースになってからちーちゃんと第二回リアル鬼ごっこを開催したんだけどね。結局、内通者は特定できなかったよ。

「……というわけでＩＳの基本的な飛行操縦をやってみよー。のコーナー！イェイ！」
「はぁ、授業ぐらい普通にはじめられないのか、馬鹿者。お前らも呆けた顔をするな！まぁいい、織斑、オルコット試しに飛んでみせろ」
「もー。この授業の担当僕だよ？」
「お前に任せれば授業が終わらん」

ひっどいなー。ちょっとふざけただけじゃん。

「わかったよ。じゃあ、一夏くんとオルコットちゃんはＩＳ展開後、急上昇ね。垂直上昇だよ？」

僕が言うと一夏くんとオルコットちゃんはＩＳを展開した。

そういえば、オルコットちゃんは代表決定戦のあとの最初の授業で謝りにきた。僕はそんなに気にしてなかったし、むしろいじめ過ぎた僕の方が悪いと思ってるよ。けど、謝らないと気が済まなかったらしい。恋の力ってすごいよね。あそこまでヒトを変えちゃうなんて。

と考えてると二人とも展開が終わっていた。

「一夏くんは起動回数少ない割に速い方だけど、まだ全然足りないよ。まだまだ伸び代は大きいんだから、精進、精進♪」

「はい！」

うん。素直でいいね。ちーちゃんもこれぐらい……、やめようキャラじゃないや。

「次に、オルコットちゃん」

「は、はいっ！」

僕が名前を呼ぶと身を硬くして、裏返りそうな声で返事をしてきた。緊張しすぎだよ。

「そう硬くならないでよ。入学式の日みたいに責め立てるわけじゃないからさ。そーだねー、正直言うことないよ」

「えっ」

「そりゃ、国代表よりは劣るけど充分速いしあとはこの三年で経験積めばオッケーだよ」
「あ、ありがとうございます」
僕がヒトを褒めるのが意外みたいな目でみないでほしいな。どこかの鬼教官と違って叩くだけが教育だと思ってないから。
……っ！？背後から殺気！
「じゃあ、二人とも飛んでみて」
そして、二機のＩＳは大空へと舞い上がった。やっぱり青空には白が映えるよ。
ブルー・ティアーズの方が速いか。スペックは白式の方がはるかに高いけど、ここは経験の差が出たね。でも、一夏くんはあり得ないほど呑み込みが速いな。
展開もそうだったけど両手で数えられるぐらいしかＩＳに乗ってないのにもうあそこまで動かせるなんて、興味深いね。
「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」
「せんぱーい、助けてくださーい！」
僕が考え事をしていると隣から箒ちゃんの怒鳴り声とまやまやの情けない声が聞こえてきた。
「あー、はいはい。箒ちゃんも先生にそんなことしちゃだめだよ！まやまやも教師なんだからもっと堂々としなきゃ、そんなことでおどおどしない！」
「し、師匠！申し訳ありません！」
「はい！が、頑張ります！」

二人から返事が聞けたところで上空にいる二人に指示を出した。

「それじゃあ、降りてくるついでに急降下と急停止を「緊急放送！緊急放送！学園にむかってくる無登録の機体を確認しました！！生徒は教師の指示に従い、速やかに第一アリーナに避難してください！なお、雨宮先生及び生徒会長、更識楯無はグランドで待機をお願いします！」…ちーちゃん」

「あぁ、授業どころじゃなくなったな、慌てるなよ！団体行動を乱すな！黙って私の指示に従え！」

「一夏くんもオルコットちゃんも聞こえたと思うけど、授業は中止。すぐに降りてきて！ちーちゃん、あとは頼んだよ」

「あぁ、……無理はするなよ」

ちーちゃんは心配そうな目で僕を見てきた。

「ふふっ。大丈夫だよ」

「……頼んだぞ」

「うん」

僕の返事を聞くとちーちゃんはまやまやに指示をだして、生徒を先導して歩いていった。

しかし、狙いはなんだ？白式狙い？……まさかね。いくらなんでも早すぎるよ。僕は量子変換で服をＩＳスーツにかえて、グランドの中央にむかって歩きだした。

「先生！それならわたくしも！」

「そうだぜ！俺たちだって！」

降りてきた二人が僕に駆け寄ってきた。

「だめだよ。相手の能力、狙い、素性もはっきりしてないのに」
「けど、わたくしは！」
「所詮、候補生なんだよ？正直言って二人とも足手まといだよ」
「「っ！！」」
僕はそういって、二人に背をむけてまた歩き出した。

「……ひどいこと言うのね」
「あれぐらい言わないと、きっと引き下がらないよ。あの子たちに怪我をしてほしくないからね。そのためならどんな憎まれ役でもやってあげるよ」

二人から少し離れたところでたっちゃんが合流してきた。しかし、生徒に戦わすかな、普通。

「先生の鏡ね。それに私は生憎、普通じゃないのよ」
「そーだね。それより情報は？」
「Ｕｎｋｎｏｗｎ（アンノーン）。何一つわかってないわ。ステルスで発見が遅れたのよ。それから先生方と専用機持ちはピットで待機、軍からの援軍はむかってるけど間に合わない」
「孤立無援ってやつだね。さいこーの舞台でうれしくて涙が出そうだよ」

なんでたっちゃんが呼ばれたかというと、これでも一応ロシア代表だからね。

「……捉えた。二時の方向、コアの反応はあるけど番号登録はなし」
「発見してから静止呼びかけも無視でただ、一直線にこっちにむかってるから狙いは学園（うち）でしょうね。きっとすぐ戦闘になるわよ」
「りょーかい。接触まで一分と三十秒」

でも、ＩＳのコアとはちょっと違うかな？
僕は違和感を感じながらＩＳの起動準備に入った。
……さて、死なない程度に頑張ろう。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７（後書き）

ちょっとオリジナル入ります。
次回、オリ主のＩＳが明らかにするつもりです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．８（前書き）

祝お気に入り登録数１００件突破！
これからもお付き合いお願いします！

Episode．8

「謎のＩＳ、アンノーンは学園の上空で停止後、攻勢に移る様子はなし。狙いは未だに不明」

楯無が現状を報告した。楯無が言った通り、アンノーンはＩＳ学園の上空に到着後何をするでもなく、ただたたずんでいる。
その機体は黒に統一され、ＩＳには珍しい全身装甲（フルスキン）。特徴はなんといってもその無骨なフォルムから伸びた体に不釣り合いな長すぎる腕と肩についた巨大なミサイルポッドだろう。
アンノーンから戦闘の意志が感じられないため、伊織も楯無もＩＳを展開していない。

「軍が来るまで、あのままだったら楽でいいのに。回線閉じてるらしいし、一回開放回線（オープンチャンネル）で通信してみるよ」
そう言うと伊織はＩＳを部分展開して通信しようとした。しかし、展開した瞬間アンノーンの赤いモノアイが伊織を捉え、無機質な声があたりに響いた。

「ＩＳ、”黒豹”を捕捉。探索から捕獲へモードを移行します」
「……そうはいかないみたいよ。狙いはあなたみたいだし」
「人生うまくいかないもんだねー。サポート頼むよ」

伊織はため息を吐きながら、ＩＳを展開した。
”黒豹”。コア以外は伊織が設計とプログラミングをした伊織の専用機。
こちらもアンノーンに負けず劣らずの漆黒である。

「了解、任せて」

伊織を楯無の返事を聞くとスラスターを全開にして海上にむかった。そして、学園から充分な距離が取れていることえを確認すると、反転してついてきているアンノーンに一気に接近した。

「黒豹から抵抗の反応を確認。一時、戦闘モードに移行します」

「残念だけど、移行する前に墜ちてもらうよっ！」

伊織は接近した勢いを殺さず、そのまま太刀―閃（せん）―を呼び出し斬りかかった。

「えっ！」

しかし、アンノーンが手をかざすと閃の動きがアンノーンに当たる寸前で止まった。

「―慣性停止結界（ＡＩＣ）だって！くっ！」

そして、アンノーンが止まった獲物を見過ごす筈もなけ、その長い腕で伊織を凪ぎ払った。

「っ！……けど、僕もタダで殴られるほど優しくはないよ！」

伊織も負けておらず、吹き飛ぶ一瞬に機雷を呼び出し、アンノーンの周りにばらまき黒豹が吹き飛びアンノーンとの距離が開いた瞬間。爆発した。

（これならある程度のダメージはあるかな？）

伊織は爆煙をみながら一息ついた。
”警告！アンノーン、射撃体制へ移行。初弾の発射を確認！”
ハイパーセンサーから敵の無事が伝えられるれ、伊織は急いでその場から退避した。そして、黒豹がいた場所を一筋のレーザーが通過していった。

「出し惜しみはしたつもりはなかったんだけど、ずいぶんと元気なんだね？」

伊織は苦笑しながら爆煙が晴れた場所をみると、無傷の状態でアンノーンは佇んでいた。

「手助けは必要かしら？」

様子を見ていた楯無から伊織に通信が入った。

「学園の守護。それよりアンノーンの解析を急いで」
「了解」

伊織は楯無に端的に指示を出すと再び目の前の敵に集中した。伊織が楯無の援護を断ったのは新手が現れないとも限らないからである。現れた場合学園の戦力が少ない今、大きな被害になるのは目に見えている。だから、大きな戦力となる楯無を学園に残してきたのだ。

「相手の装備がわからないのは予想以上に辛いな」

伊織が顔をしかめていると、アンノーンが伊織にむかって突っ込んできた。しかし、黒豹は既存のＩＳとは比べ物にならないほどのトップスピードを誇っており、易々とはつかまらない。
……しかし、いきなりアンノーンの腕が伸びた。

「嘘っ！まだ、長くなるの！？冗談！」

伊織はギリギリで伸びてきた手を避けたものの、ハイパーセンサーから残酷な通知を受ける。

”警告！アンノーンよりミサイルの発射を確認！回避不可能！”

「マジかっ！」

その直後、黒豹に小型ミサイル二発が着弾した。

――ドガァン！

轟音と共に今度は黒豹が爆煙に包まれた。

”損傷、軽微。シールドエネルギー残量、８３％”

伊織はギリギリのところでシールドを呼び出したものの、シールドエネルギーが大分削りとられた。

「このままじゃジリ貧だねー。相手は叩けば何が出てくるかわからないブラックボックスだし」

伊織はアンノーンにどんな装備があるかわからないため、防戦一方で装備を出し切ってもらうまで下手に攻撃ができない。爆煙のなかでどうするか考えていると通信が入った。

「わかったわよ。名前はウィザード、白騎士事件のあと世界の科学者が集まって創りあげた”対白騎士”の無人兵器よ。コアはわからないけど」

「騎士(ナイト)には魔法使(ウィザード)いってシャレが利いてるね。それより、アンノーンも無人機なの？」
「そうよ。あれは精密機械の塊みたいなものよ。装甲は硬いから気を付けてね」
それを聞いた伊織は笑みを浮かべた。
「じゃあ、叩き斬っても問題はないわけだ。パイロット捕まえて色々吐いてもらうために考えてたけど、それなら本気で行くよ」
伊織はそう言うと、爆煙の前で黒豹を探しているアンノーン、改めウィザードに瞬間加速(イグニッション・ブースト)で肉薄した。ウィザードが気が接近する黒豹に手を伸ばすが、そこは既存のＩＳと一線を画す黒豹。迫る手を避け一気にウィザードの懐に入り込んだ。
「長かったら、邪魔だろうから斬っといてあげるよ！」
斬ッ！
そう言って伊織は閃を呼び出し、ウィザードの黒豹を捕まえるのに伸ばした腕の付け根を下段からに切り上げた。
しかし、ウィザードは切り落とされ海に落ちていく腕には気を留めず、自分の硬度に絶対の自信があるのか黒豹にむかって零距離でミサイルを発射してきた。
……否、発射しようとした。
「一応、捕獲対象なんでしょ？そんなことしたらボロボロになっちゃうよ」
伊織は呼び出したマシンガン―霧雨(きりさめ)―でミサイルポッドの向き変え、

ミサイルの軌道をずらしたのだ。そして、伊織は一度、ウィザードと距離をとった。

「そろそろ、終わりだよ？」

伊織がつぶやき、黒豹が両手を広げると黒豹のイコライザの銃火器がすべて姿を現した。マシンガンやランチャー、ビットまで混じっている。

「装甲が自慢らしいけど、この攻撃に耐えられるかな？」

その言葉と同時にすべての銃火器がウィザードに照準を合わせ、攻撃を開始した。ウィザードも最初は耐えていたものの、徐々に装甲のへこみが目立ち始め残っていた腕も吹き飛んだ。

――ドォォォン！

そして、ついには装甲が耐えきれなくなりウィザードは爆散した。

「ウィザードは爆散。部品の回収は軍に任せる。……はぁ、疲れたよ」

伊織は通信で最低限のことを伝えるとため息をついた。

「お疲れ様。近くに敵影はなし。帰還していいわよ」

「敵影があっても僕は帰還するけどね」

「ふふっ。そのときは私が出るわよ」

伊織は軽口を叩きながら学園への帰路についた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．８（後書き）

初の戦闘シーン。

いかがでしたか？

意見や感想待ってます。辛口で構いませんのでヨロシクおねがいします m（__）m

ＩＳ設定

名前　黒豹（くろひょう）
操縦者　雨宮　伊織
製作者　篠ノ之　束、雨宮　伊織
世代　第三世代
待機状態　黒い懐中時計
装備（プリセット）
太刀　閃（せん）
マシンガン　霧雨<ｒｕｂｙ><ｒｂ>（きりさめ）
装備一<／ｒｂ><ｒｐ>（<／ｒｐ><ｒｔ>イコライザ<／ｒｔ><ｒｐ>）<／ｒｐ><／ｒｕｂｙ>
機雷、シールド、ライフル、ランチャー、ビットなど

既存のＩＳとは比にならない機動力と火力を誇るＩＳ。
メインカラーは黒。
装備はイコライザの圧縮に成功したため、近接用から遠距離用まで百種近く入っているらしい。ちなみに名前はよく呼び出すものにしかつけていない。
対ウィザード戦の最後に使った技は、全武装展開（フルオープン）。インストールしてあるイコライザを全て呼び出す技。莫大な量の計算が必要なため伊織以外不可能と言われている。

伊織の基本的な戦闘スタイルは高速切替（ラピッド・スイッチ）と豊富な装備を活かした砂漠（ミラージュ・デ・デザート）の逃げ水だが、敵や味方によって闘い方を変えるため、陽炎（かげろう）と呼ばれている（陽炎も景色によって姿形を変えるため）。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．９

僕はウィザードの後処理を軍に押し付け、もといお願いしてＩＳ学園に帰ってきたてすぐ事情聴取があるらしく会議室にむかった、学園では、避難訓練ということになってるらしい。無理があるんじゃないかなぁ？

「たっだいまぁー！」

僕は会議室の扉を開いた。

「先輩っ！お疲れ様です。大丈夫でしたか？」

「ふふっ、元気そうね。安心したわ」

「お前ならあれぐらい余裕だろう？遅いぐらいだ」

おぉう、まさに三者三様。会議室には呼ばれたであろう三人がすでにいた、上からまやまや、たっちゃん、ちーちゃん。それにちょっとぐらい心配してくれてもいいじゃないか、ちーちゃん。

「だが、お前が無事なら私は……その……う、嬉しい」

「っ！」

ちーちゃんが顔をそらしながらつぶやいた。

……くそぅ、なんだよこの可愛い生き物はっ！抱きしめたくなるじゃないかっ！！

「……あらあら、織斑先生やけに素直ね」

「教師をからかうな、馬鹿者」

たっちゃんがちーちゃんをからかおうとするが、すでにちーちゃんはいつも通りになっておりクールに反撃している。……まやまやは二人の間でおろおろしてる。
でも、ちーちゃんのデレなんて貴重だ、ひじょーに貴重だ。

「お取り込み中、失礼するわね」
「ん？」

そんな時、会議室に第三者の声が響いた。

「私は取り調べを行う、アメリカ軍所属、ナターシャ・ファイルスです。雨宮伊織及び更識楯無は……っているわね。じゃあ、両名以外は退出をお願いするわ」
「あぁ、私も余計に書類を作成するのは御免被りたい。いくぞ山田君」
「あっ、はい」

ちーちゃんたちは会議室を出ていった。二人は呼ばれてたわけじゃないのか。

「さて、始めましょうか」
「えぇー、なっちゃん僕との久しぶりの再会なのに反応薄いなぁ」
「公私混同はしないタイプなの」
「ちぇー」
「私なら嬉しすぎて押し倒しちゃうけど……どう？」

なっちゃんは笑いながら僕たちの正面の席についた。
むぅ、おもしろくないなぁ、ＴＨＥ軍人ってかんじだよ。
……たっちゃんが何か言ったけど気にしたら負けだよね、きっと。

「とりあえず、ウィザードとの戦闘についての説明をお願い」

そして、取り調べは始まった。

―――

「…これぐらいかしらね」

「疲れたー」

長い間続いた取り調べはようやく終わった。戦闘説明なんてめんどっちぃから記録映像見たらいいのに、と思ったね。そんなことを考えながら僕は軽く伸びをした。

「じゃあ、用事あるから私はいくわね」

たっちゃんは用事があるらしく、さっさと会議室を出ていった。

「はてさて、仕事は終わったよ？再会は喜んでくれるのかな？」

「ふふっ、まだよ。あなたに国際ＩＳ委員会の委員からお話があるそうよ」

「え〝っ」

何だって！？あのバカたちと話をしないといけないなんて！僕が驚いている間になっちゃんは通信を繋いでいた。

〈雨宮伊織。黒豹の全武装展開使用（フルオープン）には国際ＩＳ委員会の承認が必

要だ〉
「いいじゃん。手加減したんだし」
〈そんな言い訳が通用すると思っているのかっ！下手をすればお前も犯罪者だぞ！〉
うるさいなぁ。こっちは疲れてるんだよ。むかつく。
「……あぁあ、怒らせちゃった。私はどうなっても知らないから」
〈聞いているのか、雨宮！〉
「うるさいなぁ、黙れよ」
〈っ！何を言って！〉
「有事のとき僕たち前線はね、あんたたちみたいに椅子に座ってたら終わってるような場所じゃないんだ、常になにが起こるかわからない場所。許可なんてとってる間に殺られちゃうよ。今回なんて、あんたたちが残したいつ爆発するかわからない不発弾を処理してあげたんだから、感謝してほしいぐらいだね。許可忘れはウィザードの破壊で帳消しでいいじゃん」
〈そ、それとこれとは話が違うだろう！〉
「もっと柔軟に考えられないかなぁ？金とか地位のことしか考えられない賢い頭使ってさぁ」
〈き、貴様っ！なんてことを！どうなるかわかっているのか！？〉
「わからないよ。あんたたちみたいに僕は賢くないからね。じゃあね」
〈ま、待t〉
―ピッ
僕は返事を聞かずに通信を切った。これだからあいつらは嫌いなんだよ。

「相変わらず、あなたは凄いわね。普通あそこまで思っててもいえないわよ？」
「我慢は体に悪いんだよ」
僕は椅子から立ち上がって会議室を出ていこうとした。
「あら、感動の再会はいいのかしら？」
「んー、そんな気分じゃなくなったよ」
「残念ね。それじゃ、ゆっくり休んでね」
なっちゃんは残念そうに肩を竦めた。
「うん、いーりんにもヨロシク。またね」
「えぇ、伝えておくわ。じゃあまた」
僕はなっちゃんの返事を聞くと会議室を出て自室にむかった。
◇◆◇◆◇◆
―ドン
「あっと、ごめんなさい」
僕は自室にむかってる途中で金髪が綺麗な研究員とぶつかってしまった。ダメだ、頭が痛くてぼーっとしてた。
「いえ、私も考え事をしていて…では」
そのまま、研究員は立ち去ろうとした。

「……待ちなよ。ここはいつから亡国機業（ファントム・タスク）の基地になったのかな？」
「……」
僕が声をかけると研究員は足を止めた。……ハズレだったら恥ずかしいな。
「……あらあら、こんなところで逢うなんて運命かしら？」
「嘘つき、どうせ僕を待ち伏せしてたんでしょ……スコール？」
ビンゴだ。研究員…否、スコールはゆっくりと振り向いた。
スコール・ミューゼル、亡国企業の女性幹部。
気付いたのはいいけど、丸腰だしやり合える元気もない。ここの警備は何してんだよ。どうせ今もむこうのモニターでは異常はないんだろうし、今は授業中だし助けはなし、か。僕は体を壁にあずけた。
「好きなヒトに逢いたいと思うのはダメなの？それよりも随分と辛そうだけど、大丈夫？」
「やめてよ、敵との禁断の恋は願い下げ。正直、君にはさっさと帰ってもらいたいな」
「つれないわね。私たちの仲間になればいいじゃない」
スコールは僕のそばまでくると僕の顎を持ち上げ、顔を寄せ耳元で囁いた。
「しつこい女は嫌いだよ。返事はわかってるでしょ？」
このしんどさは疲れじゃないな。意識もしっかりしなくなってきた。
「ふふっ、じゃあ連れ去っちゃおうかしら？」

「んっ」

……耳を甘噛みされた。

「あら？いい声出しちゃって、可愛いわね」

スコールは空いてる手で僕の体を撫で始めた。

くそっ！このドSめ。けど本格的にまずいな、なんとかしないと……

「抵抗しなんて、このまま楽しんじゃうわよ？」

「……遠慮しとく、よっ！」

―ジリリリリッ！

僕は隙をついてスコールの懐から拳銃を抜き取り、火災時用の手動警報器のスイッチを撃ち抜いた。

「残念ね。また今度の機会に、ね？」

スコールは僕から距離をとってそう言った。

「次は僕がベッドの上でナかせてあげるよ。首だけじゃなくて身体中念入りに洗って待っててよ」

今日はいろんなヒトに残念がられてる気がするよ。

「それは楽しみに待ってるわ」

スコールは金髪を揺らしながら去って行った。僕はスコールが去ったのを確認するとその場に座り込み意識を手放した。

Ｅｐｉｓｐｄｅ．１０

「……知らない天井」
「お前の部屋だ、馬鹿者。それとも記憶喪失にでもなったか？」
僕が目覚めて開口一番ありきたりなギャグをとばすと隣から容赦のない辛辣な言葉が返ってきた。
「おー、ちーちゃんじゃないか。酷いねー」
「お前だからな」
誰かちーちゃんに愛情表現の方法を教えてあげてよ。このままじゃ鬱になっちゃう。
「それはお前に限って有り得ないな……そんなことより一体何があった」
「元カノに『復縁して！』って迫られてね」
僕は体を起こしてちーちゃんの質問に答えた。
「ほう、それは随分と物騒な彼女だったんだな。拳銃の所持に警備のＰＣへのハッキングそれに警備員が一人怪我だ」
ちーちゃんの眉間に皺が寄っていく。
「怒りっぽいのはダメだよ？……亡国機業（ファントム・タスク）だよ」
「っ！……そうか。お前はよく無事だったな」

ちーちゃんは心底驚いたように目を見開いた。けど、倒れた時点で無事じゃないと思うけどね。

「心配するな。倒れたのはただの疲れだそうだ」

「……”疲れ”、か」

「？どうした？」

「いやいや、なんでも。僕はどれくらい寝てたのかなぁって」

呟いた一言にちーちゃんが不思議そうな顔をしたから僕は慌てて話題を変えた。

「三日だ。それからお前が眠っている間にお前の見立て通り中国から転入生だ。ついでにお前がよく知るヤツだ」

中国の代表候補生で僕がよく知ってるヒト、か。

「……あっ！鈴ちゃん！」

「その通りだ。二組に転入して初日にクラス代表を奪ったらしい」

鈴ちゃん、本名は凰鈴音（ファン・リンイン）。一夏くんの二番目の幼馴染。けど、一夏くんの周りにはおもしろいヒトが集まるなー。

「ふふっ、おもしろいよ。クラス代表戦も荒れそうだね。でも、こんなことあったんだし中止かな？」

「いや、警備を強化して決行するらしい。とりあえずお前はしっかり休め。また倒れられたら面倒だ」

「はーい」

何も起こらないといいけど…。僕はまた横になり眠りについた。

◇◆◇◆◇◆

（……私はいつもそうだ。後になってから知る。モンド・グロッソの大会中に一夏が攫われたときも今回も現場に、傍にいて守ってやれなかった）

私はそんなこと思いながら目の前で穏やかな寝息を立てている親友の頭を撫でた。

きっと、そんなことをコイツに言えば

『あはは、僕も一夏くんももう立派な男なんだよ？自分の身くらい自分で守るさ。それに一夏くんを鍛えてるのはこの僕なんだよ？』

なんて笑いそうだ。

「ふっ、お前の前ではブリュンヒルデも意味をなさないか。……弟や親友一人も守ってやれない私にはそんな称号は不釣り合いだがな」

ひとりになるとどうもマイナス思考になってしまうようだ。私はいつもならうるさいと思っている伊織の声が無性に聞きたくなった。

まったく、生徒や同僚が今の私をみればどう思うだろうか。

（お前の顔も声も一挙手一投足が私の心をかき乱し、私が私でいられなくなりそうになる。

それが、煩わしい

――――――　否、楽しい

嫌だ

――――――　否、心地いい

この気持ちの葛藤にケリが着くことはあるのか？

声も笑顔も自分だけにむけられれば満足できるか？

……いっそお前を殺してしまえばこの気持ちは晴れるか？）

私は頭を撫でていた手を伊織のか細い喉頸（のどくび）に手を掛けた。

「……ふっ、私は一体何をしているんだ」

私は伊織の首から手を離した。守るといった相手を自分の手で殺そうとするなんてな。

次にこいつが起きたら全力で殴ってやる。私の苦労に比べれば安いものだろう。

Ｅｐｉｓｐｄｅ．１０（後書き）

後悔はしてない！（、・ω・´）キリッ

千冬をヤンデレ気味にしてみました。

ちーちゃんはきっと独占欲は人一倍強いと思ってます。

Episode．11

「さて、今日は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を勉強していこうか」
「瞬時加速？」
僕は一夏くんが代表戦までに鍛えてくれって頼まれたから第一アリーナで個人授業をしている。
「そうだよ。ＩＳの後部スラスター翼からエネルギーを放出してその内部に一度取り込んで圧縮して放出する。そのときに得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する技術」
「？？？」
「あはは、原理は別に気にしなくていいよ。一夏くんは体で覚える方が得意だし」
「お願いします」
一夏くんは申し訳なさそうに頭をかいた。僕もどこかの鬼教官じゃないし、気にしなくていいのに。
「まずは白式の戦闘スタイルの復習ね。白式の唯一の装備、雪片弐型の特徴は昨日教えた通り、自分のシールドエネルギーを消費して相手のバリアーを切り裂（イコライザ）くことができる」
「けど、なんで後付装備がつけられないんだ？」
「ＩＳには拡張領域（バススロット）っていうのがあってその容量内で後付装備がつけれるようになってるんだけど白式は初期装備（プリセット）の雪片弐型が拡張領域を使っちゃってるんだよ。でも、その雪片弐型の特殊能力はＩＳの中でも最強クラス」
「へぇー」

ちーちゃんも雪片だけで世界の頂点に立ったわけだけど、あれは出来レースだったけどね。

「だから戦闘は接近戦しかできないんだよ。まぁ、投げるんだったら別だけどね。相手に避けられたりしたら丸腰で戦闘になるけど……やってみる？」

「遠慮します」

即答。真顔で答えなくてもいいじゃん、姉弟揃って冗談通じないんだから。

「冗談だよ。おんなじ接近戦タイプならまだ闘いやすいだろうけど、大抵のＩＳには遠・中距離の武装もはいってるから雪片弐型を警戒してなかなか近づいてこないよ。その時に大きな役割を果たすのが最初に言った”瞬時加速”。開いた間合いを一瞬で詰めるのさ。ちょっと講義長くなっちゃったけどやってみるのが一番だね」

「わかった」

一夏くんは白式を展開して空中で静止した。展開も早くなってるし成長が早いなぁ、若いって羨ましいね。

「プログラミングはしてあるから、頭の中でイメージすれば…」

―ドォォン！

制御イメージも教えてないのにいきなりしようとしないでほしいね。いまだに白式はアリーナの壁の中で沈黙している。まったく前途多難だよ。

―――
――
―

「伊織兄…もう、無理…」

空がオレンジに染まり始めたころ、一夏くんが白式の展開を解いて僕に近づいてきた。アリーナの壁や地面にはたくさんのクレーターができている。無茶はしないでほしいね、片づけるのは僕なんだから。……見てる分にはおもしろかったからいいけど。

「一日で覚えてもらおうとは思ってないさ。でも、瞬時加速はエネルギーの消費が激しいから気を付けてね。白式には雪片弐型もあるんだからエネルギー残量はこまめにチェックしないとダメだよ？代表決定戦みたいな負け方はカッコ悪いからね」

「うっ……はい」

一夏くんはばつが悪そうに顔をそむけた。よっぽど恥ずかしかったんだろうね。

「アリーナの使用時間ももうすぐ終わりだし、今日はここまでにしようか」

「はい、ありがとうございました」

そう言って、深く頭を下げる一夏くん。律儀だねー、これもちーちゃんの教育のおかげかな。

「あっ！そうそう一つだけ質問に答えてほしいんだけどいいかな？」

「改まってなんだよ。別にいいけど」

一夏くんは笑って僕の顔を見た。

「もし、ちーちゃんが一夏くんたちもっといえば世界に仇をなす存在になったら、君はちーちゃんを……殺せる？」

「何言ってんだよ！そんなことっ！」

「怒らないでよ、もしの話だって」

「……俺はそうなったら千冬姉も救いたいと思う。千冬姉と世界なんて天秤にかけられない。だから、俺はそうなる前にみんなを守ってみせる！千冬姉も伊織兄もみんなも」

「ふふっ、ありがと。ゴメンね？急に変な質問してちょっとした好奇心だよ。じゃあ、僕は片付けがあるから着替えて寮に帰っていいよ」

「気にしなくていいぜ。明日もよろしくお願いします」

一礼して一夏くんはアリーナから出て行った。

……何であんなことを聞いたんだろうねー。けど君はホントに甘いよ、甘すぎるよ。いつかわが身を滅ぼしそうなくらいにね。

でも、その甘さは、

「――僕は嫌いじゃないなぁ」

僕のつぶやきは誰にも聞かれることなく、アリーナに霧散していった。

君はきっとその甘さも力に変えていくんだろうね。もし、君がわが身を滅ぼしそうになったとき僕が守ってあげるから安心して自分の道を進むといいよ。

◇　◆　◇　◆　◇　◆

「姉さんに質問！ヒトって死んだらどうなるの？」
「うーん、難しいことを聞くね。天国や地獄があったり、無だったり、転生したりっていろんな考えがあるけど死んだら帰ってこれないから誰にもわからないのよ」

仲のよさそうな二人の幼い子供が会話をしている。人間なら一度は疑問にもつ話題だが、そんなことを考えるには幼すぎるだろう。

「ふーん。じゃあ転生してまた姉さんと姉弟がいい！」
「ふふっ、うれしいこと言ってくれるわね。でも、まだ先は長いんだから死後のことなんて考えちゃダメよ？」

どうやら二人は姉弟らしい。姉さんと呼ばれた少女が弟であろう少年を諭しながら頭を撫でた。

「わかった！」

少年は嬉しそうに返事をした。実に微笑ましい光景だろう。……”二人だけを見れば”、二人の周りには十を超える死体の数。よく見れば二人の服も返り血だろうか、赤黒く変色している。

「家に帰ろうよ、みんなもきっと待ってるよ？」
「……そうね」

少年の言葉に少女は一瞬表情を暗くしたが、すぐに少年に笑顔を向け少年の手を取って歩き始めた。そして、二人は闇の中へ消えていった……。

◇◆◇◆◇◆

「……夢、か」
――「……夢？」

まったく、あの夢なんてそろそろ死期が近いのかな？僕はベッドから出て外へ向かった。
――ふふっ、あの夢をみるなんて私もどうかしてるわね。私はガウンを羽織ってベランダへ出た。

「んー、いい天気だなぁ。憎たらしいぐらいに」
「どうした？お前が感傷に浸るなんて今日は槍でも降るんじゃないか？」
――「嫌になるぐらいにいい天気ね」
――「どうしたんだよ？空になんかあるのか？」

僕が空を見上げているとちーちゃんに声をかけられた。そこまで言わなくていいじゃないか、ちーちゃん。
――私が空を見上げていると部下に声をかけられた。私だって感傷に浸る時ぐらいあるのよ。

「まぁいい。遅れるなよ」
――「それより上がお呼びだぜ？」

そう言ってちーちゃんは校舎にむかって歩いて行った。そうだね、頑張らないと。
――そう言って部下はいってしまった。私もいかないとね。

「「（僕／私）たちは、もう歩いている道が違うんだから……後戻りは出来ない」」

どこで間違えたんだろうね、姉さん？

――私たちは生まれたのが間違いじゃないかしら、伊織？

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１２

クラス対抗戦、当日。
一回戦、一組の相手は二組。つまり、一夏対鈴の試合が第一試合から実現する。

「一夏くんも成長したしちょっといい勝負にはなるかな？」

伊織は向かい合い試合開始の合図を待つ、一夏と鈴の姿をピットのモニターで見つめていた。伊織はこの試合までの期間、一夏を近接格闘と瞬時加速（イグニッション・ブースト）をはじめとする急加速急停止を徹底的に教え込んだ。

「織斑が勝てる確率は？」

千冬がモニターを見つめている伊織に声をかけた。

「うーん、三割あるかないかぐらい。所詮は付け焼刃だし」
「そうか」

そう言って千冬もモニターに目を向けた。

（……でも、途中で乱入されて終わっちゃうけどね）

伊織は昨日の親友からの電話を思い出してそっとため息をはいた。

『――白式のデータとるためにＩＳの無人機乱入させるからヨロシクね～♪』

親友とは、今やその名を知らぬ人はいないだろうと言われる、ＩＳの開発者篠ノ之束（しののたばね）である。

（たばねんのことだし、殺しはしないだろうから大丈夫だと思うけど。いざとなれば僕が守ればそれで済むことだしそれを考えてたばねんは僕に電話をしたんだろう）

「どこに行くんだ？」

「すぐに帰ってくるよ」

千冬に声をかけられたが試合が始まるのも確認せずに伊織はピットを出て行った。

―――――

―――――

―――

―――

「まったく……君たちはＩＳを集めて宇宙開発でもするつもり？」

「……」

伊織は誰もいないはずのアリーナのＩＳ格納庫で黒服の男たちに囲まれていた。

「……最優先事項、雨宮伊織及び黒豹」

「ヒトの話は聞かないといけないんだよ？それに、僕は男色（なんしょく）には興味はないんだよ。男たちに追われてもうれしくないね」

男たちは抑揚のない声で小さくつぶやくと戦闘態勢に入った。伊織も軽口を叩きながらもどこからきても対処できるように警戒してい

る。

「……時間はあんまりないよね」

伊織はこの現状をどう打破するか考えを巡らせた。相手は三人、剥離剤（ムーバー）を持っている可能性があるため黒豹は使えない……。様々な情報が頭の中で統合され結論を導き出した。

「なら、一撃必殺（ワンショット・ワンキル）ッ！」

伊織は瞬きの隙に男の一人の懐に入り込み鳩尾に拳を叩きこんだ。

「ガハッ！」

男は防御する暇もなく吹き飛び、息つく間もなくあとの二人が伊織の技後硬直を狙って仕掛けてくる。しかし、伊織はその攻撃をうまく避けるとすぐに壁を使い大きく跳躍すると男の一人の頭に踵落としを放ちそのまま振りぬいた。

「ヴッ！」

「……ラスト」

男は頭から鈍い音を響かせ地に伏せた。伊織は骨を砕いた感触を感じながら呟く。今まで表情に変化がなかった最後の一人の顔に驚愕の色が浮かぶ。男たちも強いとは聞いていたもののここまでとは思っていなかったのだろう。……だが、男は胸に焼けるような熱さを感じそんな思考を中断して胸を見た。

「ッ！」

そこにはじわじわと広がる赤いしみ。

「僕がＩＳ以外の武装を持ってないとでも思ってたの？」

正面に立っている伊織の手には拳銃が握られている。男にはいつ撃たれたのか、いつ抜いたのか理解できなかった。しかし、その結論が出る前に男の意識はフェードアウトしていった。

「防弾チョッキはなしか。賭けだったけど結果オーライということで……」

伊織は倒れている三人を冷たい目で見つめながら袖口に拳銃をしまいこんだ。

「伊織、何をしているんだ？」

「っ！ちーちゃん！？」

あわてて振り返るがそこにいたのは逆光で顔はよく見えないものの、口元に歪んだ笑みを浮かべた女性だった。

「ちーちゃん、じゃない……うっ！」

伊織は突如肩に激痛を感じ、視線を巡らせると肩には小さな穴が開いていた。撃たれたのだ。伊織は振り向きざまに生きているであろう最初に倒した男の頭に銃弾を撃ち込んだ。男がまた地に伏せたのを確認すると入口付近をみるが女性の姿はすでになかった。

「……いまのは？」

袖を引きちぎり、傷口を止血しながら伊織はさっきの女性について

考えていた。

（ちーちゃんに似てた。……声だけかもしれないけど）

――ズゥゥン！

しかし、大きな音とともにアリーナが少し揺れ伊織は顔を上げた。

「はぁ、製作者と一緒で空気が読めないんだから」

伊織はため息を吐き、止血した肩を押さえながら格納庫から出て行った。

Episode．13

「――あなたたちがしっかりしないでどうするの！避難誘導急いで！」

楯無は一夏と鈴の試合に乱入してきた謎の機体によってパニックに陥っている観客を避難させるために無線でせわしなく指示を飛ばしている。

「たっちゃん、大丈夫？」

「…伊織さん」

そこに伊織が現れたものの二人にいつものふざけた様子はなく険しい表情でアリーナの中を見つめている。

「避難完了までのおおよその時間は？」

「この調子だと三十分以上はかかるわね。ただでさえ、観客が多かったのに生徒も含めてみんながパニックになってるのよ」

「群集心理は怖いねー」

出口に殺到している観客を見ながら伊織は肩を竦めた。

「そうね。それより、突入予定はどうなのよ？」

楯無はため息を吐き同意して伊織に尋ねた。

「アリーナの遮断シールドがレベル４、扉が全部ロックされてるんだ。だから、優秀な三年生がシステムクラック中。終わり次第突入だ、ってちーちゃんが言ってた」

伊織はアリーナのステータスが表示されている端末を見せながら、こっちもいつになるかわからないよ、と苦笑を浮かべた。

「それじゃ、避難の方は任せるよ」

楯無に手を振り伊織は歩いていこうとしたが、楯無に手を掴まれできなかった。

「その怪我、どうしたの？……それに遮断シールドがレベル４でも黒豹の火力なら突入出来るんだから、普通ならあなたが突入して終わらせるでしょ？いったい、何を隠してるの？」

楯無は黒い服で分かりにくかったが伊織の肩から血が滲んでいるのをみつけて引き留め猜疑の目で伊織を見つめた。

「……ころんだ」

「ウｓ「一夏ぁっ！」！！」

スピーカーから聴こえた大音量の声に驚いた楯無は伊織を掴んでいた手の力を緩めてしまい伊織に逃げられてしまった。

「ふふっ、僕はいつでもイイ子の味方だよ？」

そして、伊織の姿は見えなくなった。

◇　◆　◇　◆　◇　◆

「――オオオッ！」

一夏は今にも箒にむかってビームを発射しそうな謎の機体に龍砲のエネルギーを使った瞬時加速（イグニッション・ブースト）で謎の機体に接近した。

（間に合えっ！）

そして、発射口がある右腕を零落白夜（れいらくびゃくや）で切り落とした。

……だが、刃が届く寸前で一夏の願いも虚しく箒にむけ発射された。

一夏には箒にむかっていくビームも目を固く瞑った箒の顔もハイパーセンサーではっきりと見えた。

「逃げろ！箒ぃぃ！」

――ドォォン！

謎のＩＳはセシリアの射撃によって爆発を起こし落下。箒のいた中継室は爆音とともに爆煙に包まれた。

しかし、一夏には爆音の直前で確かに聞こえた。

――中継室付近に熱源。ＩＳ学園所属”黒豹”と断定。

箒もいつまでも来ない衝撃にゆっくりと目を開けた。

「……師匠」

そこには箒が師と仰ぐ伊織の姿が。

「箒ちゃん、その年で自己犠牲は、褒められたもの、じゃないよ？

それとも、僕が来るのを、知っていたのかな？」

「っ！！」

いつもの軽口を叩いているが伊織は息も乱れており明らかに弱っていた。そして、伊織のＩＳ展開速度は世界でもトップだが今回の展開は安定していない。

「伊織兄っ！」

伊織がシールドを展開していたはずの突き出している腕が焼けて爛れていた。

「ホント、人生は上手くいかないよねー」

伊織は自嘲的な笑みを浮かべながらゆっくりと倒れていった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１３（後書き）

Ｔｈｅ　王道

とりあえずヒロインは誰にしようか……

Episode. 14（前書き）

千冬が男前。

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１４

「う……？」

俺は体の痛みで目を覚ました。伊織兄が意識を失った後、再起動した謎のＩＳを倒したのは覚えてる。どうやらここは保健室のベッドの上らしい。

「気がついたか」

「千冬姉…！伊織兄はっ！っつぅ…」

俺は勢いよく体を起こしてベッドの横に座っている千冬姉に目を向けた瞬間全身に激痛がはしった。

「全身に軽い打撲だ、無理をするな。龍砲の最大出力を背中で受けたんだ。絶対防御もカットしてな。よく死ななかったものだ」

千冬姉が呆れたようにため息をはいた。けど、伊織兄はもっと酷いはずだろう。

「伊織兄は大丈夫なのかよ？」

俺は落ち着き、改めて千冬姉に尋ねた。

「……あいつなら病院だ。今は峠も越えて安定している。命には別状はない」

「よかっｔ「よくはない」！！」

安堵して漏らした言葉は千冬姉の冷たい口調の一言によって遮られた。

「ビームを受けたとき展開したシールドが不安定で受けきれなかった熱による熱傷で右腕の細胞が壊死。……右腕を切断し失った」

千冬姉からは一切の感情が感じられず、原稿を読み上げる機械のように事務的だった。

「…嘘、だろ」

二の句が継げなかった。シールドが不安定？ありえない。展開技術なら世界で一番だって自慢気に伊織兄は話してた。それに絶対防御だって……

「あいつはお前らの試合中にＩＳを盗みにきていた連中との戦闘で肩を撃たれていた。この意味がわかるか？」

俺は伊織兄の最初授業を思い出した。

ＩＳは操縦者の考えを読みとり行動（アクション）を起こす。装備の展開も同じである程度は補助してくれるが操縦者のイメージが安定しないと装備が呼び出せなかったり、不安定になったりする。つまり、思考に邪魔が入ればそれだけ不安定になる。

「……痛みとか貧血で集中できなかった」

「たぶんな。黒豹自体に不具合はなかった。それと黒豹には絶対防御は積んでいない。拡張領域（バススロット）を極限まで拡げるためにあいつが自分で外したんだ」

あいつも馬鹿だからな、と時計を見ながら続けた。気づけば外もオ

レンジ色に染まってきている。けど、伊織兄を守れなっかたのは……

「……俺の所為だ。俺がもっと」

視線を落とすと無意識に握っていたシーツに皺が寄っていた。

「自惚れるのもいい加減にしろ、馬鹿者！お前が私や伊織を守る？はっ、寝言は寝て言え。お前はまだ強くはないんだ、私や伊織の足元にも及ばん」

千冬姉に怒鳴られたのは初めてだった。それ以前にこんな感情的な千冬姉は初めてだ。そして、感情を抑えて静かに千冬姉は続けた。

「いいか。私たちは弱くはないんだ、自分の身ぐらい自分で守る……だから、今は力をつけろ。そのためにここにいるんだろう？」

「伊織はお前たちに後悔してほしくて守ったんじゃない。……お前たちの可能性に賭けたんだ。自分の腕とお前たちの未来を比べてあいつはお前たちの未来をとった。後悔する暇があったら勉強でもしたらどうだ？」

「……」

「後悔して部屋に引き籠ってる馬鹿者どもにも伝えておけ。それと……今度は守ってやれよ、あいつは弱くなったんだからな」

「っ！わかった」

千冬姉は俺の返事を聞くと満足そうに笑って保健室を出て行った。

けど、家族で一番近くで見てきたからわかる。

……一番後悔してるのは千冬姉じゃないのか？

Episode. 15

「…あいつは何をしているんだ」

私は伊織の様子をみるために病院にきたが、担当医からその本人が点滴を引き抜いて病室から消えたと聞き捜している。そして、私は目星をつけていた屋上に続く扉を開いた。

――キィ。

扉は古い音を発てながら開いた。

……いた。

海を望む屋上の柵の上に座っていた。左手は柵にかけているが右の袖が海風に煽られパタパタとはためいている。こちらに背中を向けているために表情はわからなかった。

「やはり、ここに居たか」

「んー。ちーちゃんじゃないか。ここがよくわかったね？」

「ふっ、煙と馬鹿は高い所を好むと言うからな」

嘘だ、伊織ならここにいるだろうと思っていた。伊織はひっどいなー、といつもの調子で返されたが伊織はまだこっちを向こうとはしない。私もなかなか一歩が踏み出せなかった。拒絶を怖れているのか、我ながら情けないな。

「ねぇ、ちーちゃん」

「……なんだ」

伊織は海の方を向いたまま、ゆっくりと語りだした。

「僕はね、自分は強い。ううん、なんでも出来ると思ってた」
「そうか」
「…でも、違ったみたい。敵が強かったわけじゃなかった。これは僕の油断、過信、慢心が生んだ結果」
そう言った瞬間強い風が吹き、右腕が無いことを強調するように伊織の右袖が大きくはためいた。
「……」
いつもならきっと罵声の一つでも浴びせてやるのだが、今は言葉が出てこない。
「だから、ちーちゃんが悲しむことなんてないんだよ?」
「っ！」
もう一度強い風が吹くと伊織の顔がいつの間にか吐息のかかりそうな距離にあった。驚いた顔を見せると伊織は悪戯っぽく笑った。
「ふふっ、顔に出てるよ。いくら取り繕っても所詮は偽物、僕が気付かないとでも思ったの?」
昔からそうだった、こいつには私を含めて誰も隠し事が出来なかった。どれだけ作ろうがすぐに見抜かれてしまう。
「無事だったらこんなに大事にならずに済んだのにね。けど、たかが腕一本じゃない」
「お前っ！」

伊織は少し離れて言った。〝たかが〟その言葉に無性に腹が立ち、つい語調が強くなってしまった。

「怒らないでよ、ちーちゃん。箒ちゃんが一夏くんを救って僕が箒ちゃんを守った。箒ちゃんがあそこで叫ばなきゃ、一夏くんと鈴ちゃんはやられてたかも知れない。それを箒ちゃんは命を張って守った。僕が飛び出さなきゃ箒ちゃんは死んでただろうね。……いい？僕は生きてる。片腕は無くなったけど生きてるんだよ？命に代えられるなら、僕は喜んで四肢ぐらい差し出す。そーだね、これは戒めであり名誉の負傷なんだよ」

「！！」

伊織は優しそうに微笑んだ。

まったく、本人がここまで前向きなのに私は何を考えているんだろうな。勝手にひとりで下を向いてただけ、か。あいつらのことを言えた義理じゃないな。

「……それに僕にはシリアスは似合わないよ。もちろん左腕はちーちゃんが洗ってくれるんでしょう？」

からかうような笑みを浮かべた。こいつのいろいろな笑顔にどれだけ救われてきただろう。しかし、こいつはいったいどれだけの笑顔を使い分けるんだ？……だが、すぐに違いがわかる私もなかなかの重傷のようだ。

「ふざけてないでさっさと病室に戻るぞ、馬鹿者」

私は踵を返して屋上の出口に向かった。素直になるのは難しいものだな。一応、小さくありがとう、と呟くと後ろから

「ふふっ、どういたしまして」

と返ってきたとき心が軽くなるのが感じられた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5535t/

IS(インフィニット・ストラトス)　―黒揚羽（クロアゲハ）―

2011年6月15日21時27分発行